OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	プロジェクトの概要
Author(s)	渋谷, 勝己
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2002, 4, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23198
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第4号（2002年3月）1-10

プロジェクトの概要

渋谷　勝己

1. はじめに

1.1. 問題のありか

日本の方言学界や社会言語学界は、共通語化ということについて、方言を消滅においやるといったかたちで進行するだけではなく、共通語と方言の二方言話者を生み出すことでもあると把握したときから、共通語と方言、あるいはより一般的にカジュアルスタイルとフォーマルスタイルの使いわけ、切換え事象にも興味をもちはじめた*。

この事象の具体像を捉えるために当該研究分野では、もっぱら調査票を使った面接調査やアンケート調査を行ってきた。たとえば次のような方法である。

(a) まずはじめに、たとえば親しい人と話すとき、テレビのインタビューに答えるときといった、スタイルを左右すると予想されるいくつかの場面を設定する（井上史雄による新方言の調査（井上1985など）など）。

(b-1) 続いて、上記（a）の場面ごとに、共通語と方言のどちらを使うか、その内省を問う。（『月刊言語別冊 変容する日本の方言』1995 大修館書店など）

(b-2) あるいは、さらに言語変項を設定し、上記（a）の場面ごとにどのような形式（具現形）を使用するか、その内省を問う。

この方法による研究は、これまで一定の成果をあげてはきたが、次のような問題点をかかえるものでもあった。

(c) (b-1) による方法は、「共通語と方言がまじる」といった選択肢を回答に含めることが多いが、基本的な発想は、コードの選択はドメインごとに行われるといったものである。しかし、inter-／intra-sentential code-switching などの事象が示すように、コードの切換えは、ドメイン間においてのみ行われるとは限らない。

(d) 関連して、同一ドメイン内でコードの切換えが行われるとき、(b-1) の方法では具体的にどの言語項目が切換えの対象となるかも不明である。

(e) 一方 (b-2) の方法は、切換えの対象となる言語項目を設定しはするが、その取り上げ方は恣意的であり、コードの切換えを体系的に把握したものとは言えない。

(f) また (b-1) (b-2) いずれの方法も、基本的に内省調査であり、実態をどの程度把握しているかに疑問が残る。

以上のような問題点を問題のありかとして認識し、スタイル切換え（style shift）プロジェクト（略してSSプロジェクト）を立ち上げた。次節にその概要を記す。

1.2. 本プロジェクトの概要

本プロジェクトは、さまざまなスタイル切換え事象のなかから、

(a) 日本語方言話者のスタイル切換え（以下、「方言 SS」とする）

(b) 日本語中間言語話者のスタイル切換え（以下「中間言語 SS」とする）

の２つを取り上げて、その切換えの実態を素描することをもくろむものである。具体的には、方言 SS プロジェクトは、

(a-1) 青森、東京、大阪など、いくつかの地点においてフォーマルな談話とカジュアルな談話を録音収集し、分析することによって、各地のスタイル切換えの様相を描き出すこと

(a-2) また各地点の切換えのありかたを比較することによって、その共通点と相違点を浮き彫りにすること

といったことを目的とする。また中間言語 SS プロジェクトは、

(b-1) 母語を異にする中級日本語学習者のフォーマルな談話とカジュアルな談話を録音収集し、分析することによって、そのスタイル切換えの様相を描き出すこと

(b-2) またそれぞれの学習者が見せる切換えのありかたを比較することによって、その共通点と相違点を浮き彫りにすること

といったことを目的としている。また、両プロジェクトをあわせて、

(a・b-3) 日本語母語話者と日本語中間言語話者のスタイル切換えのありかたを比較することによって、その共通点と相違点を見出すこと

といった目的も同時に設定した。

(a-1) については、1.1 であげた問題点を是正することを試みるものである。

(b) については、学習者の社会言語能力を解明する作業の一環として盛んに研究されるようになってきたが（Tarone 1988、Ellis 1989 など）、日本語中間言語を対象としてはまだあまり研究が行われていない。自然な談話を分析に用いたものも少なく、また、母語話者のスタイル切換えのありかたと比較したものもそれほど多いわけではない。日本語非母語話者の急増という社会的なできごとによってもたらされた、社会言語学が対応すべき新たな言語事象として、本プロジェクトの対象とすることにした。

以下、本稿や各報告からうかがわれるように、本プロジェクトはパイロットスタディであり、調査や分析の方法にまだ荒削りなところが多い。しかし、われわれが考えている、今後、この種の研究が目指すべき方向性は、十分に示すことができていると考える。

2. テーゼ：理論的検討

本プロジェクトでは、最初のステップとして、コードスイッチやスタイルシフトの研究を概観・展望した先行研究（Labov 1972、Heller 1988、Thomason & Kaufman 1988、Romaine 1989、Hyltenstam & Obler 1989、Milroy & Muysken 1995、Li 2000、Muysken 2000 など）を

検討し、検証対象としての簡単なテーゼを設定した。社会言語面、文法面、心理言語面の３面にわたるものである。以下に掲載する。

(1) **個人のもつコード・スタイルの複数性**：話し手個人のなかには、どのような話し手であっても、複数のコードやスタイルが併存する。

(2) **併存するコード・スタイル間の連続性・不連続性**：個人のなかに併存する複数コードの関係には、不連続なものと連続なものがある。

(2-1) 個人のなかに併存するコードやスタイルは、複数の言語であることも、同一言語の複数の方言や待遇形式であることもある。

(2-2) 連続的なコードには、方言－共通語連続体などがある。

(2-3) 不連続なコードには、英語と日本語、一部地域の伝統的な方言と共通語、などが考えられる。

(3) **コード・スタイルの切換えタイプ**：連続的なコードの場合も含めて、人は必ずコードスイッチ・スタイルシフトを行う（以下まとめて「切換え」とする）。

(3-1) 切換えは、ドメインごとに行われるタイプ（ドメイン間タイプ）と、同一ドメイン内部で展開される会話のなかで行われるタイプ（ドメイン内タイプ）の、２種類がある。

(3-2) 同一ドメイン内部において切換えが行われるドメイン内タイプの場合、その切換えにあずかる単位という観点から見たとき、さらに次のようなタイプが設定される。

(a) 文間切換えタイプ

(b) 文内（節間・句間等）切換えタイプ

(c) 項目切換えタイプ（(4) 項参照）、など

ひとつの会話のなかには、これらのタイプがともに現れる場合もある。

(3-3) ドメイン間タイプの切換えは質的な切換えである。一方ドメイン内タイプの切換えには、ある種の（言語内的・言語外的）制約条件によってカテゴリカルに整理できるタイプ（質的）、規則的可変的なタイプ（量的）、規則性が観察できないランダムなタイプがある。

(4) **項目切換えタイプ**：言語項目による切換えは、音声・アクセント・プロソディ・文法・語彙・談話マーカ等、さまざまなレベルにわたることが予想される。

(4-1) どの言語項目が切換えのために活用されるかは、二つのコードやスタイルの言語間類似度（連続度）、あるいは、その項目の言語的特徴・使用頻度・方言としてのステレオタイプ度・形式的 saliency などがかかわるが、予測はできない。

(4-2) しかし、切換えにあずかる言語項目が、個人ごとに異なるといったことはない。各々の言語共同体において、その共同体に特徴的な一定のものに収斂する。

(4-3) そのなかでも次の項目は、どの共同体でも活用される可能性がもっとも高い。
- 文末詞等の談話的・伝達的モダリティ形式
- 文化的語彙（親族名称等）

(5) **切換えの機能**：切換えの担う機能は多様であり、ダイナミックである。

(5-1) 個々の（特にドメイン内タイプの）切換えが果たす機能は、それぞれの状況に応じて多様である。またひとつの切換えが担う機能は、単一とは限らない。

(5-2) ドメイン内タイプの切換えは、会話の進行状況（言語外的制約条件の変化）に制約されると同時に、逆に状況に変更をもたらす場合もあるといった、ダイナミックな機能をもっている。

(6) **コード・スタイルの併存状況の流動性**：個人、あるいは言語共同体に併存する複数コード・スタイルは、静的状態にあるとは限らない。

(6-1) たとえば個人の場合、language acquisition／maintenance／attrition の諸段階を反映し、個人のそれぞれのコード・スタイル使用能力は変化する。

(6-2) また、個人のなかに併存するコードやスタイルは互いに影響を及ぼしあって変容することがある。

本プロジェクトでは、ここで整理したようなテーゼの、ひとつひとつの項目の妥当性を検討する。また同時に、コード・スタイル切換え研究のなかで長年にわたって議論されてきた、

(a) 言語間の切換えと方言－共通語間の切換えは、同じメカニズムによって行われるのか否か

(b) 丁寧体―常体間の切換えは、カジュアルスタイル－フォーマルスタイルの切換えにあずかる他の形式（方言形式 vs 共通語形式など）の場合と同じメカニズムによって行われるのか否か

といった２つの問題に何らかの答えを見出すことを試る。その他、切換えを左右する言語外的制約条件として指摘されてきた、注意度（William Labov）、計画性（Elenor Ochs）、オーディエンスデザイン（Allan Bell）、アコモデーション（Howard Giles）、わきまえ（井出祥子）といった観点の妥当性を考察しつつ、日本語母語話者と日本語中間言語話者のフォーマルスタイル－カジュアルスタイルの切換えのありかたを、切換え事象全体のなかに類型論的に位置づけることも、本プロジェクトの検討課題として設定した。

3. 調査の概要

次に、本プロジェクトが採用した調査の概要について、データ収集の方針（3.1）と調査の方法（3.2）にわけて説明する。

3.1. データ収集の方針

データを収集するに当たって、まず、以下のような方針を設定した。

(a) 個人における、できるだけ極端なスタイル切換えの状況を把握する。

(b) その地域居住者や学習者の、スタイル切換えの（意識ではなく）実態を把握するようつとめる。

(a) については、家族や親しい友人の場面（カジュアル談話）と、初対面の場面（フォーマル談話）の２つの場面を設定した（次項参照）。スタイルそのものは連続的なもので、両者の中間にさらにいくつかの段階を設定することが可能であり、また、公の場面など、よりフォーマルな場面を設定することも理論的には想定できるが、本プロジェクトではパイロットスタディとして、データ収集が比較的容易な、しかも、確実にスタイル切換えが観察されそうな２場面だけを設定した。

(b) は、これまでの先行研究における、調査票を用いての面接調査と方針を異にするところであり、本プロジェクトでは、実際に交わされた自然な会話のデータのみを分析の対象とした。またその会話データを録音収集するに際しても、たとえばフォーマルな場面でフォーマルなスタイルを引き出すために、調査者が会話全体にわたって意図的に敬語を使用するようなことはしていない。会話の自然な展開にまかせつつ、それぞれの場面（ドメイン）内部におけるスタイル切換えの実態もあわせて観察できるようにした。

3.2. 調査の方法

次に、調査の具体的な内容について、方言 SS プロジェクト（3.2.1）と中間言語 SS プロジェクト（3.2.2）にわけて述べる。

3.2.1. 方言 SS プロジェクト

3.2.1.1. 調査地点および分析対象者

調査地点は表１の通り。担当責任者および報告計画（○＝本号、→＝次号以降）をあわせて示す。

表１　調査地点・担当責任者および報告計画（方言 SS プロジェクト）

地　点	青森	仙台	東京山手	東京下町	名古屋
担当者	阿部貴人	阿部貴人	松丸真大	松丸真大	高木千恵
報告誌	○	→	→	○	→
地　点	京都	大阪	高知	山口	鹿児島
担当者	辻加代子	高木千恵	高木千恵	舩木礼子	舩木礼子
報告誌	→	→	○	→	→

各地点で収録した談話は、基本的に、老年層と若年層の話者の、次の５つの組み合わせで行われたものである。談話の長さはそれぞれ最低 30 分とした。枠で囲んだ部分が、今回

の分析対象者である。

(1) 60代生え抜きA×60代生え抜きC (カジュアル場面)
(2) 60代生え抜きA×20代生え抜きA (カジュアル場面)
(3) 60代生え抜きA×20代外来者 (フォーマル場面)
(4) 20代生え抜きA×20代生え抜きC (カジュアル場面)
(5) 20代生え抜きA×20代外来者 (フォーマル場面)

若干説明を加える。

(a) 調査地点については、異なる切換えタイプをもつことが予想されるということを基準とし、プロジェクト参加者の検討を経て選択を行った。東京のデータは、中間言語 SS プロジェクトのベースラインデータとしても使用する。ちなみにこの予想ということについては、たとえば筆者には、これまでの経験から、東北地方では主にドメイン間タイプの切換えが、関西ではドメイン内タイプの切換えが行われているという予想があった。

(b) 場面については、分析対象者のもつカジュアルスタイルとフォーマルスタイルを引き出すために、生え抜き同世代間((1) (4))、生え抜き異世代間((2))のカジュアル場面と、初対面((3) (5))のフォーマル場面を設定した。ここでいう「生え抜き」とは、基本的に、外住歴が5年以内の場合を言う。

(c) 分析対象者は、基本的に男性とした。女性の場合、カジュアル場面でも丁寧なことばの使用に傾くことが指摘されており、切換えの幅が男性よりも狭くなることが予想されたためである。ただし、枠で囲んだ分析対象者以外の会話の参加者には、そのような条件はつけていない。「20代外来者」は、一部の例外を除いて調査者(男・女)があたった。

(d) 老年層と若年層では保持する共通語コードと方言コードのありかたが異なっていることも考えられ、両者を調査対象とした。老年層は60代、若年層は20代を基本とする。

(d-1) 60代の分析対象者については、70代でも可とした。生え抜きの分析対象者(上の「60代生え抜きA」と「20代生え抜きA」)は祖父と孫の関係にある場合を基本としたが、その場合、祖父が70代にあるケースもあったためである。逆に、孫が10代というケースもわずかながらあった。

(d-2) 20代の分析対象者は、社会人・学生いずれも可としたが、社会人を中心に選んだ。社会人のほうが、切換え能力があると判断したためである。

(e) なお、上で「基本的」と記した項目については例外がある。分析対象者が見つからずに、(2)「60代生え抜きA×20代生え抜きA」のカジュアル場面が設定できなかった調査地点や、分析対象者が女性となった地点などがあるためである。

(f) 調査の目的について、インフォーマント(分析対象者および会話参加者)には、ことばの調査であるとだけ告げた。収録した談話をことばの分析に使用することの許可は、すべてのインフォーマントから得ている。

インフォーマントの詳しい属性については、各報告の冒頭にまとめた。

3.2.1.2.　話題

話題については特に指定せず、自然な展開にまかせることとした。ただし、話につまったときのために、以下の話題マニュアルを事前に用意し、適宜選択することとした。一般に老年層の調査の場合、戦時中の話などを含めることがあるが、本プロジェクトでは 60 代を設定したために、特に入れることはしなかった。

各地点のデータにおける話題については、各報告末尾に添付した談話データの冒頭に、その流れを示した。

表２　話題一覧（方言 SS プロジェクト）

老年層	若年層
ことばの変化（若い人のことば）	伝統的な方言
テレビのことば	東京・大阪のことば
居住地とことばが違うのはどこか	居住地とことばが違うのはどこか
趣味（周りを見渡せ）	趣味
仕事	仕事
居住地の観光地	居住地の観光地
若い頃の（食）生活	
居住地の変化（街のにぎわい・交通等）	
気候	気候

3.2.2.　中間言語 SS プロジェクト

3.2.2.1.　分析対象者

本プロジェクトの分析対象者は、表３にあげる母語をもつ、日本語中級学習者である（デンマークは参考データ。「報告誌」欄の記号については表１を参照）。ここで分析対象者となる学習者について中級を選んだのは、中級が、デス・マス以外のストラテジーによるスタイル切換え能力を身につけかけた時期であり、習得の過程に見られるスタイル切換えの問題が最も顕著に浮かび上がる時期と判断したためである。

表３　母語・担当責任者および報告計画（中間言語 SS プロジェクト）

母　語	中国	韓国	アメリカ	タイ	デンマーク
担当者	樋下綾	李吉鎔	橋本貴子	永見昌紀	永見昌紀
報告誌	○	○	○	→	→

日本語学習者から事前に、日本語を使った学習者の言語行動は母語話者に対するときと学習者に対するときでは異なるという内省を得ていたので、会話の相手には、次のように、親しいあるいは初対面の日本語非母語話者（日本語中級・上級学習者）と日本語母語話者（日本人学生）の、計４人を設定している（左側の枠で囲んだ部分が今回の分析対象者）。

(1) 日本語中級学習者×日本語非母語話者（親）　　（カジュアル場面）

(2) 日本語中級学習者×日本語母語話者（親）　　（カジュアル場面）

(3) 日本語中級学習者×日本語非母語話者（初対面）　（フォーマル場面）
(4) 日本語中級学習者×日本語母語話者（初対面）　（フォーマル場面）

さらに可能な場合には、

(5) 日本語中級学習者×教師（初対面）　（フォーマル場面）

として、教師との間で交わされた談話も含めることとした。

談話の長さは、方言SSプロジェクトと同様、それぞれ最低30分とした。

インフォーマントの詳しい属性については、各報告の冒頭にまとめた。

3.2.2.2. 話題

中間言語SSプロジェクトの場合にも、話題は自由とした。ただし方言SSプロジェクトと同様、話題がとぎれた場合を懸念して話題一覧を事前に用意し、会話の相手に渡した場合がある（永見昌紀作成）。各データにおける話題については、各報告末尾に添付した談話データの冒頭に、その流れを示した。

表4　話題一覧（中間言語SSプロジェクト）

phase 1　はじまり
あいさつ、自己紹介
phase 2　現在
自分の専攻、自分の家族、ふるさとのこと、生活パターン、趣味・特技
好きなー、現在履修している科目、現在住んでいるところ、日本の印象
phase 3　過去
日本にいつ来たか、日本での経験、日本語学習歴、日本語学習動機、専攻選択動機
phase 4　意見
環境問題、教育問題
phase 5　未来
週末の予定、春休みの予定、来年度の予定、将来の希望
phase 6　おわり
あいさつ

4. 報告計画

本プロジェクトの成果報告は、本誌4号（本号）および5号（2003年3月刊行予定）、6号（2004年3月刊行予定）において行う予定である。

報告は、総括報告と個別報告の、2つの様式にわけて行う。

4.1. 総括報告

総括報告は、表1（5ページ）および表3（7ページ）に報告計画として述べたもので、スタイル切換えにあずかった言語項目をできるだけ網羅的に取り出して分析するものである。本号に掲載した報告は、すべてこのタイプの報告である。

それぞれの総括報告は、次の構成をもつ。

1. 調査の概要
   1.1. インフォーマント情報
   1.2. 談話情報
2. 結果および考察
   結果：語形の採否基準と各場面ごとの用例数の分布
   解釈：結果についての解釈
3. まとめ
4. 展望

付録　5（4）場面の談話データ例

互いに参照しやすいように、報告の構成はできるだけ統一したが、「結果および考察」の内容については、各報告によって取り上げた項目が異なるので、統一することはできなかった。この欠を補うために、各報告で取り上げた言語項目を一覧表にまとめたものを別に作成して本号に添付した。その他、報告間で統一した事項については、本概要のあとに凡例を掲載した。参照されたい。

4.2. 個別報告

個別報告については、本誌５号以下に掲載する。内容は、

(1) 各地点（方言 SS プロジェクト）、各母語（中間言語 SS プロジェクト）ごとの詳細な分析
(2) 地点間（方言 SS プロジェクト）、母語間（中間言語 SS プロジェクト）の比較
(3) 母語話者の切換えと中間言語話者の切換えのありかたの比較
(4) コード・スタイル切換えの類型化

などを予定している。

4.3. その他

その他、調査の問題点・反省点などについては、次号でまとめる予定である。

* 本稿は、平成 13 年度科学研究費補助金（基盤研究（B）(1)、研究課題番号 11480052）「現代日本語の音声・語彙・意味・文法・談話における変異と日本語教育」（研究代表者　日比谷潤子）によるものである。

【引用文献】

井上史雄（1985）『新しい日本語―《新方言》の分布と変化―』明治書院

Auer,P. ed.（1998）*Code-switching in Conversation: Language, interaction and identity.* London: Routledge.

Ellis,R.（1989）Sources of intra-learner variability in language use and their relationship to second language acquisition. In S.Gass, C.Madden, D.Preston and L.Selinker eds. *Variation in Second Language Acquisition: Psycholinguistic issues*. Clevedon: Multilingual Matters, pp.22-45.

Heller,M. ed.（1988）*Codeswitching: Anthropological and sociolinguistic perspectives.* Berlin: Mouton de Gruyter.

Hyltenstam,K.and L.K.Obler eds.（1989）*Bilingualism across the Lifespan: Aspects of acquisition, maturity and loss.* Cambridge: Cambridge University Press.

Labov, W.（1972）*Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Milroy,L.and P.Muysken eds.（1995）*One Speaker, Two Languages: Cross-disciplinary perspectives on code-switching.* Cambridge: Cambridge University Press.

Muysken ,P.（2000）*Bilingual Speech: A typology of code-mixing*. Cambridge: Cambridge University Press.

Romaine,S.（1989）*Bilingualism*. Oxford: Basil Blackwell.

Tarone,E.（1988）*Variation in Interlanguage*. London: Edward Arnold

Thomason S.G. & T.Kaufman（1988）*Language Contact, Creolization, and Genetic Linguistics.* Berkley: University of California Press.

Li,W. ed.（2000）*The Bilingualism Reader.* London: Routledge.

しぶや　かつみ（大阪大学大学院）
sbj@let.osaka-u.ac.jp